

校内研究だより 第3号

南関第三小学校
令和6年9月30日
研究主任：福永隆智

【研究主題】

粘り強く課題解決に取り組む児童の育成
～書く力を高める国語科学習を通して～

【目指す資質・能力】

協力する力・考える力・やり抜く力

9月18日（水）第5校時、松永先生が、4年国語科の研究授業を行いました。

○単元名「気持ちの変化に着目して読み、感想を書こう『ごんぎつね』（光村図書4年下）」

 <p>2回以上読めました。</p>	 <p>ゴンはつまらないなと思っています。</p>	 <p>兵十の気持ちは変わった？ 変わっていない？</p>
<p>①6の場面の音読。1回読むごとに、向きを変えています。</p>	<p>②前時の学習の振り返り。まとめを発表しました。</p>	<p>③めあてを板書し、話し方を提示しました。</p>
 <p>仕返しをしようとしていたけど、・・・</p>	 <p>私はかわったと思います。わけは、兵十はごんがくりをくれていたことに気づいたからです。私にはかわっていないと思います。わけは、ずっと思いこんでいたから間違っていたとみとめたくくないと思ったと思います。</p>	 <p>この言葉から、気持ちが変わったと考えたのですね。</p>
<p>④グループで、気持ちが変わった理由を話し合いました。</p>	<p>⑤家庭学習で書いてきました。</p>	<p>⑥デジタル教科書で線を引いた所を確認しました。</p>
 <p>⑦どこで兵十の気持ちが変わったのかを話し合いました。</p>	 <p>⑧大事な言葉は何かを考えて、まとめを書きました。</p>	 <p>ごんは本当はやさしいやつだった。</p> <p>⑨まとめの発表。</p>

★ 共通実践事項

○タブレットの活用

○書けるようになるための手立ての工夫

◎先生方の授業後の感想

夏休みから、かなりの時間をかけて準備をされて、本当にお疲れ様でした。子どもたちが自在に活用できるまで、タブレットの活用レベルを引き上げられており、びっくりしました。当たり前、全員が使えるのがすばらしかったです。発問や活動など、試行錯誤しながらも挑戦されている姿が本当に素敵でした。（石田あき）

今回、反転学習にチャレンジされたことは、とても大切なことだと思います。本校の目指す「学習者視点での授業づくり」につながると思います。協働的な学びの時間を十分確保していくことで、子どもたちの書く力が身に付くように、今後も研究していけたらと思います。(松井剛)

授業研究会

◎自評 (松永)

- ・家庭学習で、タブレットの教材文に線を引き、気持ちを書くことまでさせておいた。それをもとに、授業で深める学習を1の場面から繰り返してきた。
- ・全員が「気持ちが変わった」という意見だったので、もっと兵十の気持ちに迫らせたかったが、深いところまでいけなかった。

◎質疑応答

- ・タブレット活用の良かった点は、全員が自分の考えをもって、授業に参加できたこと。課題は、家庭でするので、早く終わらせようとして、深く考えないこと。
- ・家で書くとき、書き方の提示はしていない。学校では、まとめの書き方を提示した。家のWiFi環境が整っていない子は、学校でさせていた。
- ・教師としては、「ごん、おまいだったのか」の部分で、兵十の気持ちが変わったと考えている。
- ・1～5の場面ごとにめあてが違うので、まとめの書き方も変わった。
- ・何も書いていない子はいなかった。量はそれぞれ違う。
- ・キーワードは、子どもの言いたかったことや大事だと思ったこと。
- ・話し方の提示について、「〇ページ〇行目から」と言わせるようにしたが、タブレットでは、ページや行が教科書と異なる。

◎グループ協議で出た意見

観察児童	Aの児童：気持ちも理由もすらすらと書けていた。 Bの児童：気持ちは書けたが、理由は書くまでに時間がかかったり、教師の助言を必要としたりした。 Cの児童：気持ちは書けていたが、理由は書けなかった。
課題と改善策	・ごんの気持ちが分かる部分は赤、兵十は青というように、線の色を統一して分かりやすくする。 ・書いている文を共有したり、友達の考えを自分の考えに付け加えたりする時間を作るなど、協働的な学びの時間を確保する。 ・タブレットと教科書の使い分けを考える。 ・書く場面のめあてを同じ形にし、まとめの書き方をそろえる。 ・理由を書くのは難しかったので、根拠を書くようにする。(〇〇という言葉から) ・家で書いてきたことの発表だけで終わっていたので、「やさしいだけ？」など、揺さぶりの発問をする。

県立教育センターの下中一平指導主事から、指導助言をいただきました。

- ①子どもたちがどんな資質・能力を獲得したかを、「□□したこと(資質・能力)で☆☆が分かった。」
「〇〇に着目したことで☆☆が読めた。」などの子どもの言葉で評価する。
 - ②6の場面で兵十の気持ちを読み取らせる際、子どもの読みが狭いので、「移り変わりを想像」させることが必要である。
 - ③子どもの「読み」は見えないので、「可視化」させるとよい。そうすると、違い(ズレ)が見える。
可視化とは、読みのアウトプットであり、3、4年では心情曲線、1、2年では動作化、ペープサート、音読などがそれに当たる。違いが明らかになったら、本文に戻る。
- 指導事項について、国語のどの力を付けるために指導するのかを考えておく必要がある。

タブレットを使った家庭学習を、授業に活用された松永先生のチャレンジに拍手!